庭における適応」（大西教授らとともに）

このうち，2)および3)の研究主題は，上述の 2.青年期に関する研究に包括することが可能である。

最後に，依田教授を会長とする「青年心理学研究会」（第2回）が，昭和45年12月6日に，名古屋大学教育学部で開催されたことを付記する。 (1971年11月22日)

(1) 塩田芳久編：自主性の基礎理論 明治図書 1970.10
(2) 大西誠一郎編著：親子関係の心理 金子書房 1971.1
(3) 宮川知彰司会：シンポジアム“高等教育における青年” 日本教育心理学会第13回総会 神戸大学 1971.10

(1971年11月22日)

研究の方向づけと経過

大橋正夫

私の研究の最終的な目標が対人関係の心理学の体系を樹立することにあること，そして現在そのためのアプローチとして三つの方向をとっていることは，前報に記したとおりである。このうちの第一，対人関係の心理学的構造の問題については，考究は特記するほどの前進をみせていないので省略することにし，他の二点について研究のその後の経過を記すことにする。

1. 印象形成過程の研究――この問題については，私は以前から関心をもち，少しずつ研究をしてきているが，それはいずれも個人研究としてであった。しかし，本年度にはいってから，私のほかに5名の方の参加を得て研究チームが構成された。そして，私個人の力では及ばないようなスケールの研究ができるような体制が次第にできあがりつつある。このチームは，本年度当初の討議において，二つの方向から印象形成の問題にアプローチすることが決定された。

その第一は，パーソナリティの印象形成における，与えられた言語的情報の統合過程に関する研究である。すなわち，数個の特性語を架空の人物に帰着させることによって形成されるパーソナリティの印象の評価的次元上の評定値が，特性語のそれからどのように予測されるか，という問題である。これについての現在までの成果は本巻の他のところに記載されている。これは，研究のいわば序報にあたるものであり，今後いっそうこれを発展させていく予定である。なおこの概要は，9月におこなわれた日本グループ・ダイナミックス学会第17回大会において発表された。

チームの研究課題の第二は，顔写真を手がかりとした，未知の人物についての印象形式過程の研究である。これは，当初は第一の課題と並行的に進行させる予定であったが，第一の方に精力の集中を余儀なくさせられたため，ほとんど進行していない。現在計画を検討中であるが，同一人物のカラー写真と白黒写真による印象のちがいをまず検討することになろう。

2. 構造モデルと線型モデルの比較検討――この研究は昨年度後半から私の個人研究として進行中である。これも広義の印象形成の問題と考えることができよう。すなわち，数人からなるグループに対する評価（それに参加したいかしたくないか）が，構成メンバーに対する評価（行動を共にしたいかしたくないか）からどのように予測されるか，という問題からはいっていく。その予測のためのモデルとしては，パーソナリティ印象の場合の予測のためにたてられた平均モデルをはじめとする線型モデルが適用できよう。しかし，要素間の関係を無視するかかるモザイックなモデルではすべてをおおいつくすことはできない。やはり構造的な観点がそこに必要になってくる。少くともこの両者の構想を相互補完的に援用することによって，いずれか単一の観点よりする予測よりもより精度の高い予測が可能となることを明らかにした。近日中に論文として発表する予定である。

(1971年11月22日)

研究経過報告

続 有恒

昨年と同様，「紀要」17巻の〆切から同18巻の〆切までの1年間の研究経過について，簡単に述べる。

1. 「いわゆる過疎地域」の家族関係の研究では，7月中旬に熊本県球磨郡水上村へ出かけ，昨年同様40数ケースの面接資料を採集したほか，中学生および青年団の人たちと集団面接による資料採集をした。8月上旬には，

学部学生の研究実習の一環として，再び長野県上村へ出かけ，昨年面接したケースを一部含めつつ40余ケースの面接資料を採集した。この再訪は，村内の一部落に対する自動車開通の影響をみるためのものであったが，昨年の面接と合せて，われわれの資料の信頼性をチェックすることにもなる。

さらに，この研究については，科学研究補助金総合研究を申請していたが，幸いに若干の研究費が得られ，その研究費の範囲内での研究計画を樹てた。北大，三宅和夫氏，山形県教育研究所，三沢清男氏，広島大，小川一夫氏，熊本大，鈴木康平氏を共同研究者として，札幌市，山形市，名古屋市，広島市，熊本市およびそれぞれの周辺に離村してきた「いわゆる過疎地」からの人々に対する面接調査を実施し，既に手にしている各現地での面接結果と総合しようとするものである。われわれとしては，長野県上村からの離村者40名，岐阜県坂内村からの離村者40名を面接する計画である。

なお，既に実施した長野県，山形県，愛知県，島根県での面接資料等は，今後の立論，立証のための基礎であるので，これを整え，「研究資料」1～4としてタイプ印刷した。引続き，本年の面接についてもこれを行なっていく予定で仕事を進めている。

また，昨年の調査のうち，中学生に実施した質問紙調査の整理結果を日本教育心理学会第13回総会（於神戸大学）で発表することになったので，研究全体の構想について冒頭に報告した。

2. 「質問紙型式のパーソナリティー・テストに関する方法論的吟味」については，その第二報告が「教育心理学研究」19巻2号に掲載された。引続き，織田揮準・鈴木真雄両君の協力を得て，第三報告のための資料採集を進めている。これは，66個の項目について，該当・非該当などの判断を求めると共に，その判断の際に手掛りとして想起した事項，および呈示した項目の反対の意味にあたる内容をチェックしてもらうもので，66ページにわたる大きな調査である。大学生を被検者とし，約1,600名のデータが集まる予定であり，既に集まったものについては集計中である。

なお，この結果の一部を検討し討論した結果，この研究は，あと第四，第五報告までは少なくとも必要であるということになったので，まだ当分は継続するわけである。

3. 「大学入学者選抜方法研究委員会」の仕事は，当然ながら継続中であり，本年10月に，昭和45年度分と昭和46年度分の報告書を出した。このうち，46年度分では，「入学試験の学力検査で同程度の成績を収めている者について，出身高校の如何により，入学後の成績（教養部および学部）にかなり差がある」こと，「その差は，高校在学中の成績が同一段階であった者を，高校別に比較した場合」よりも大きな差であることが判明した点が，興味ある点である。

4. 本年4月，京都大学の高瀬常男氏との共同編著として，教育学叢書第11巻「教育指導」が刊行された。教育指導，すなわちガイダンスを，その荷い手である教師の在り方，内的教師論として述べようというわれわれの意図が，十分実現したかどうかは問題であるが，一つの行き方を示しえたと思っている。

5. 過疎研究の学会への発表とは別に，同じ日本教育心理学会総会において，シムポジアム「児童・生徒理解のための実践的研究法」をオーガナイズし，司会した。広く教育研究における臨床学的研究の必要性，教育心理学における実践的研究の必要性は，今日まで折に触れて述べてきたが，その研究方法を討論する以前に，まだ，実践的または臨床的研究の必要性について，十分な納得がないように思われた。教育心理学者は，いわば「真空の中の人間行動」を研究すればよいのであるとの発言さえあった。

学会発表というには遠い感じがするが，8月29日，日本医学教育学会総会に招かれて，「教育評価について」の特別講演を行なった。医学教育が種々論議されている折柄でもあろうが，医学者がこの問題について，かなり熱心に考え，諸外国でのいわゆる評価法などについても調査研究しているのに感服させられた。

（1941年11月22日）

1971年度の研究活動の概要

丸　井　文　男

1971年5月に，永年の要望であった，特殊実験棟（臨床棟）が新たに文学部との中間に完成し，臨床グループは，そちらに移転した。万点の施設とまではいえないが，従来よりもはるかに仕事がしやすくなった。ことに play room が2個ととのい，又，行動分析室が整備されたので，治療の分野では，ことに好条件になった。

これにともない，大学院学生諸君の研究室も2部屋移転し，routine の活動は，大変便利であり，ケースも漸